

# 神物語～聖夜の闇匣～

かいきあえ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

粉雪が舞い散る聖夜、黒井 昴は妹の雪女から頼まれた買い物を済ませ帰路についていた。そこで見た目が小学生の少年？と不意にぶつかってしまった。そこでのぶつきらぼうな少年の態度に苛立ちを感じたのもつかの間、直後に黒塗りの高級車がその幼い命を狙う。あまりの出来事に見過ごせなかった昴は身を呈してその少年を救うのだった。しかし、これは悪夢の幕開けに過ぎなかった・・・。

# 目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
19	14	10	6	1



# 第1話

## 第1話「出逢い」

昴「くっ……俺は確か……いきなり意識を奪われて……ここは……どこだ？」

見渡す限り、真つ暗闇が広がる静寂の空間。状況を把握する為にも、昴は冷静に数分間闇を味わった。

そして数分後、目が慣れて多少の空間把握が出来るようになった。しかし、分かるのはここが狭い部屋であること、この部屋の入り口らしきドアが1つある事くらいしか現時点では分からなかった。窓は一つもないところを見る限り、ここは地下室なのだろう。しかし、幸運なことに1人ではないらしい。今把握した感じでは昴を含め、5人は確認出来る。こんな狭い部屋にこんな大所帯……勿論、コミュ障の昴には少々地獄であった。が、このまま沈黙を貫いても何も始まらない、昴は頑なに閉じていた口を開いた。

昴「あの……皆さん大丈夫ですか？」

??「ああ、なんとか怪我も何もねえ。」

昴の問いかけに答えてくれたのは、まさかのあの時救った少年であった。

昴「あ!!お前はあの時の・・・まあ、今は無事を素直に喜ぼう」

??「へっ、お気楽なもんだぜ。こちとら命狙われてたかもしれないねえつてのに。でもまあ、あんたが身を呈して救ってくれなければ今の俺はない。その、まあ・・・ありがとう。」

相変わらず口は悪いが、感謝はしてるようだ。まあ、多少の礼儀はなってるようだ。昴「まあ、無事なら良かったよ。何でこうなつたのかは全く分からねえ。今後のことも考えて、それぞれ軽く自己紹介しておかないか?」

??「人にものを尋ねるならまずは自分からだろ?」

いちいち毒々しく悪態をつくガキに多少イラつきつつ昴は自分の紹介を始めた。

昴「まあ・・・そうだな。俺は黒井 昴、俳優をやってる。テレビにはちよこちよこ出てる芸能人だ。よろしく」

輪廻「昴ってあの昴君か!!通りで見覚えがあると思った。僕は佐野、佐野 輪廻(さの りんね)って言うんだ。スポーツを色々とやってて体力には自信がある。好きに呼んでくれて構わないよ。」

輪廻と名乗つたその男は見た目は小柄ながらも、どうやらスポーツ選手らしい。体格はがっちりしている・・・正直ギャップなのが声が少し高い

。まあ最近こういった声の高い男性が増えてるし驚きはあまりないのだが、やはり

少し慣れない・・・

昂「輪廻か、珍しい名前だな。まあ力仕事とかは色々任せよ、よろしく。次は君だね」

卦堂「俺は卦堂 鶏式（けどう けいじ）、医大で医療の勉強をしている。趣味は八卦道、我流ではあるが一応師範並みの実力あるつもりだ。よろしく。」

相変わらず変わった名前が多いな・・・でもまあ、不幸中の幸いつてやつだな。医大生つて言つてたけど、医者（卵）がいるのは正直心強い。

卦堂は身長も高い、あんな長身から放たれる八卦とか想像しただけで恐ろしい（）てか、そもそも医大生が八卦極めてるつてこれまたツツコミどころが・・・うーん、今回は見逃しておこう。

昂「おう、医者は結構助かるな。よろしく!!えーつと次は・・・」

赤崎「私ね。私は赤崎 成美（あかさき なるみ）職業は訳あつて今は話せないわ。決して変な仕事はしてないからそこら辺よろしく。」

この5人の中で紅一点、職業が不明つてのは少し気にかかるが、まあプライベートつてことで。

とてもスレンダーでスタイルもいい。思春期の息子にはちよつと刺激が強いかもしれんな（ナニの話をしているのだろうか）。

輪廻「変な仕事って何よ……？」

赤崎「さあ？ただあなた達が思ってるほど危ない仕事はしてないから安心して。一応人に言える仕事はしてるから。」

昴「さてと……ラストは」

凜「俺は水野 凜（みずの りん）男だ。職業って言えるほどのことはしてない、普通の学生だ。特に馴れ合うつもりはない、よろしく。」

凜と名乗った少年は周りが高校生以上の年齢でありそうなか、唯一小学生のような体格をしている。つてかこれコ○ンじゃね？と思わせるような小学生ではないような風格をしており、いかにも頭はずば抜けて良さそうだ、ただ小学生ならもう少し可愛げがあってもいいと思うのだが……。

昴「さてと、みんな自己紹介も終わった所で状況を把握しよう。まず、ここはどこか分かるかい？」

凜「分かってれば今頃は脱出してらるだろ、ちったあ頭使おうぜ有名人さんよ？」

昴「……まあ、だな。」

輪廻「それにしてももう少し言い方考えよ？相手は年上なんだし」

凜「ふつ、年上がそんなに偉いか？お前らみたいな腐った大人が俺をこんな目に合わせなきゃ、もう少し……子供らしく……」



凜の言葉が詰まる。その静かな目は憎悪に満ちていた。  
次回へ続く・・・

## 第2話

### 第2話「兆し」

昴「ともかく、手分けしてここを搜索してみよう。このまま、ここでのんびりしてても何も変わらない。」

輪廻「そうだね。さてと・・・搜索するにしてもメンバーをどう分けるかとかは考えてるのかい？」

昴「いや・・・まだみんなの事も把握しきれてないのもあって、ここは公平にくじ引きにしようかと・・・」

凜「へっ、結局大人つつても考えることはガキか。」

赤崎「こちら凜くん、考えはどうあれ君の先輩なんだから。もうちよつと使う言葉を気を付けなさい。」

凜「・・・はい。」

・・・やけに素直だな。やはりガキはお姉さんに弱いものなのだろうか？

何はともあれ、昴・輪廻・凜グループと卦堂・赤崎グループに分かれた。

凜については昴と顔見知りだからという理由でこっちになった。

凜「まあ……くじ引きじゃしようがないわな。さっさと終わらせようぜ。」

ホントにちよろいなこのエロガキ……。と満面の笑みでその場を流しつつグループでの行動が始まった。

グループで分かれて行動と言っても実際には、この館はあまり広いわけでもなく、閉じ込められた部屋は地下1階だったのだが、分かれて行動し始めたのは1階に着いてからだった。地下は昴達が閉じ込められていた部屋以外に目立つものもなかったのだが、1階は見た感じ全部で4部屋で昴達は2部屋ずつ分担して捜索することとなった。

さて、まずは昴グループ、光源は輪廻が持つていたライターで周りを照らしつつ捜索を始めていた。

輪廻「みんな、今から部屋から聞こえる音を探るから静かにね。」

輪廻は昴達に注意を促しつつ扉に耳を当てようとした。……が彼も世界を飛び回るスポーツ選手、日頃の疲れが出たのだろう。耳を当てるつもりがそのままおでこをぶつけてしまい、その勢いで扉も開けてしまった。

運良く部屋の中は空であり、恐らく倉庫だと思うが特に目立つものもなかった。

凜「何やってんだよ……この人。」

輪廻「ごめんね、こんなつもりじゃなかったんだけど……」

昴「ともかく、部屋には何もなさそうだな。」

3人はそのまま部屋を去り、隣の部屋を探り始めた。

輪廻も扉から部屋の聞き耳をし、先程の部屋のような誰もいない空間である事を察した。

ゆつくりと扉を開いていく。その部屋はどうやら先程とは違い、机や椅子がいくつか並べられている客間のような部屋だった。

奥に暖炉らしきものもある。もちろん火など付いてるわけもない。あくまで微かな光の中3人は搜索している。

輪廻「うーん・・・これはここの館の主の名前かな？」

輪廻が見つけた肖像画の下に名前と思われるプレートを見つけた。

しかし、日本語でなければ英語でもなさそうだ。

昴「ダメだ、読めそうにねえ。ここはバスかもな。」

凛「俺らのグループは収穫無し・・・か。」

輪廻「まあこんなこともあるよね。あつちと合流してみようか。」

凛が言った通り収穫は無かった。時間制限がないとはいえ、ここから脱出したいのに情報が無いというのは、昴や輪廻を確実にじわじわと焦らせていった。

視点は変わって卦堂赤坂ペア。光源は赤坂が持つていたマツチを使って道を照らしていた。赤坂が何か鍵を握ってる、不確かながらも謎めいた女性である事に変わりはない。

い。卦堂は慎重に赤坂と話していた。

卦堂「あ、赤崎さん。」

赤崎「なあに？卦堂君だっけ？そんなに堅くならなくてもいいのよ？そうねえ、せつかくペアになったんだしお互いに情報交換でもしよっか？」

赤崎は卦堂に対しにこやかに微笑んだ。卦堂もぎこちない感じではあったが笑顔を返しつつ本題を聞いてみた。

卦堂「赤崎さんは、何をしている人・・・なんですか？僕ら全員が集まってる間では危険な仕事じゃないとしか教えてくれなかつたですけど・・・」

なんだこの初々しいカツプルみたいなのは・・・さつさと爆発してくれませんかねえ？という作者の嫉妬は置いといて、赤崎はすぐさまいつもの涼しい顔で言うのであった。

赤崎「ホントいきなりね。うーん・・・でも卦堂君だしいいかな？私はね、実はこの館を知ってるの。」

卦堂「えっ・・・」

赤崎「半年前、私はここの館の従業員だったの。」

卦堂と赤崎の間を冷たい風が吹き抜けていった。

次回へ続く・・・

## 第3話

## 第3話「暗闇」

赤崎の突然のカミングアウトに卦堂は呆然と立ち尽くすしか出来なかった。最悪の事態を予想しつつ、赤崎は話を続けた。

赤崎「私は少し、他の人とは変わっててね。千里眼……って言うのかな？つまり未来が視えるの。っていつてもそんな大層なもんじゃないのよ？私に視えるのは自分に起こる危険なこととか、直接じゃなくても私が間接的に危険な目に遭ってるっていうのも私には予知できる。」

正直頭がこんがらがりそうだった。デジャヴとか予知夢とか、現代で未来が視えるなんて話は珍しくもないからだ。ただ、それ故に疑問も残る。ただ、今彼女を問い詰めるのは良くない。卦堂はそう判断し、赤崎の話に真剣に耳を傾けるのであった。

赤崎「私が千里眼を使える事に気付いたのは数年前よ。とはいっても、私にも最初は分からなかった。でも、視える映像に従えば私に危害が及ぶことは無い。それだけは理解出来た。」

卦堂「つてことは、今まで辛いものばかり視てきたんだろ？相談とか出来なかったの

か？」

赤崎「私にはそういった友達とかいないし、家族や親戚も疎遠で何の情報もない。こうなると私の悩みなんて話すに値しないんだろうなって思ってた。だから・・・ホントは人と接する事自体、私には怖くてね。でも、みんなあんな暗闇にいて不安なのは一緒だから私なりの強がりをしてみた。ホントは今は無職よ、みんな立派だなぁって羨ましかったわ。」

卦堂「・・・少し、辛い話をさせたかもしれないな。ごめん。」

赤崎「いいのよ。ここまで話が出来たのも初めてだなあ。ちなみに元々働いてたのはホント。千里眼でここの館の主が危ないってのも分かった。でも・・・」

卦堂「でも？」

赤崎「その映像には、今まで見たことない私があったの。後にあなた達が来ることも分かってたけど、孤独で寂しいことからの解放とかじゃない、笑顔の私が。今まで人と接するのを恐れて避けてきた私が、人に対して笑顔なんてどうしてだろう？そんな好奇心から私は1人あの地下牢であなた達を待つてたってわけ。」

卦堂「なるほどね・・・。ここの主人が危険だつてのは分かった。具体的には分からないのか？」

赤崎「ごめんなさい、私の千里眼も鮮明に覚えられるのはいくつかだけだから。あつ、

でも働いてただけでこの主人の名前は知ってるわ。ここの館の主人は……破道龍獅（はどう りゆうじ）」

卦堂「破道……か。分かった。」

赤崎「それと……私がここで働いてたのは2人だけの秘密にして。」

卦堂「……分かった。うまい具合に話はまとめとくよ。」

こうして卦堂は赤崎からここの館のことや、主人である破道がおかしくなっていた経緯を彼女の見たままの話を聞いた。そして1階に大したものがないのも実は知っていた赤崎は卦堂と共に集合場所へ導くのであった。

こうして集合場所にて昴達が集まった。

昴「すまん、こっち側はあまり収穫なかったよ。」

凜「……なんか、ホントに申し訳ない。」

卦堂「俺達も大体そんなもんだ。得た情報についてもここの主人のことくらいで。」  
輪廻「それなら僕達も肖像画らしきものを見たよ。名前は……ちよつと分からなかったけどね。」

卦堂「いや、大丈夫だ。やつ……俺らを閉じ込めた犯人の名前は破道龍獅、どうやら半年前までは普通のおっさんだったらしいけど、日が経つにつれて何かに取り憑かれたかのように狂っていったそうだ。」



赤崎「私達がなんで捕まえられたのか・・・それについては分からなかったわ。」

凜「そう・・・だったんですね。」

昴「凜？どうした、浮かない顔してよ。」

昴が凜を心配し、肩に手を置いた途端に凜は今までの俯いていた顔からその形相を変え、昴を思い切り睨んだ。そして、初めに会った時の口調でぶちまけた。

凜「てめえ・・・。やっぱここに来てから何も覚えてないようだな。この主人の名前だとか目的は知らねえけどよ、俺らがここに来る必要は無かつたんだよ!!俺がトラックに轢かれかけた時、俺があそこで死ぬなんてことは絶対なかった。それをアホみたいに自分から車に突っ込んで行ってよ・・・。」

赤崎「凜君、そんな言い方・・・」

凜「すみません赤崎姉さん、でもこれだけは言わせてください。俺は・・・俺らは、お前の優しさのせいでこの主人の企みにまんまと釣られたんだよ!!」

次回へ続く・・・

## 第4話

## 第4話「特殊」

凜は語気を強めて己の怒りを発したが、もちろん理解しがたい内容である。確かに昴は人と接するのは苦手だが困ってる人を助けられない性格だ。でも、その優しさが今の災いを生む？この主がそこまで奇々怪々な人物なのか、昴は考えを巡らせながら黙り込んでしまった。

輪廻「まあまあ、凜くん。少し落ち着こうよ。君達に何があつたのかは知らないけど、優しさが災いを生むって言われても僕らも理解し難いし、君の意見には賛成しづらいよ。」

凜「賛成なんて・・・同情なんていりませんよ。僕もコイツを除いては何も知りませんから。」

卦堂「だとしても、言い方が意味深すぎるぞ。言葉をあまり知らない子供をあまり責めることは出来ないが・・・」

赤崎は静かに凜をじつと見つめている。だがその視線はいつもの赤崎とは違うような気がした。もちろん、その事に気がついたのは凜だけだが。

卦堂「とにかく、俺らに話せるヒミツがあるんなら話してくれないか？俺らが捕まった原因が分かるかもしれない。もちろん差し支えなければだが。」

凜は少し俯いた。昴を今まで睨んでいた時のような覇気は消えたが、昴に対する目だけは変わらぬままであった。その時、黙り込んでいた昴が口を開いた。

昴「俺は・・・お前が轢かれそうだった所を助けた。ありがた迷惑つて言葉も聞かなくてどうも腑に落ちない。こういうのを非難される理由も全く分からない・・・。」

凜「おい・・・てめえホントに何も覚えてないのか？クロイス。」

周りのみんなは黒井昴の名前を呼びやすくしたもののなかと解釈したが、昴だけは何か頭を過ぎ去るような痛みを感じた。

なんだ・・・この頭痛。名前を呼ばただけなのに変な違和感と、凜に言われた「覚えてない」の言葉が昴の頭を混乱させ、その場に倒れてしまった。

輪廻「おい!!昴君、大丈夫かい？」

卦堂「凜、お前は一体・・・」

赤崎「大丈夫よ、シヨックで気を失っただけみたい。少し横にしてあげたらいいと思うわ。」

赤崎の冷静な対応が輪廻や卦堂の緊張を解いた。そして言われた通り昴をその場に寝かせる。

赤崎「さて、聞かせてくれる凜君？あなた達のこと。」

凜「本当は誰にも言いたくなかったけど、仕方ない……ですよ。分かりました、話します。少し長くなりますけど、とりあえず最後まで聞いてください。」

凜は誰にも気付かれないうような部屋にみんなを移動させ、少し俯いたまま話し始めた。

凜「端的に言います。まず、僕と昴はこの人間じゃないです。僕は天界の妖精リン。そしてこいつ、昴は天界の神クロイス。僕らは2人でこの下界に来ました。本来なら僕は要らないんですけど。まあ……少し訳あります。こいつ、クロイスは天界でもかなり優秀で下界に来る際に記憶を失うようなヘマはしないはずなんです。本来は……」

昴「俺が……神？」

昴は自分で何があったのか理解出来ないような様子で、凜の話に入ってきた。

輪廻「そうみたいだね、何も覚えてないっほいけど。」

卦堂「そうだとしても、俺らに何か起こるわけでもないだろ？それがこの原因を呼び込んだなら話は別だが。」

凜「まあ、確かにそれだけなら何も起こらないです。詳しいことが分からないと何も言えませんが、僕の予想では僕ら1人1人に特殊な能力的なものがあるってそれで集められたんじゃないかと思えます。僕は妖精、そしてこいつは神ですし。」

特殊な能力、その言葉を聞いたみんなが己の過去を振りかえる。確かにこの現代に妖精や神がいるって事実だけでも頭が追いつかない。しかし、自分も人とは違う。始めに少しおどけたのは赤崎だった。卦堂がその様子に気付き彼女を自分の背後に隠す。だが、卦堂にも心当たりはあった。過去に起こった不思議なこと、そしてそれは輪廻も同じだった。自分がスポーツ選手としてやれてるのはいいが他の人には真似出来ない事が自分には出来る。2人にとって疑問でもあったが強みでもあった。それ故に疑問は心の奥深くに消えていたのだろう。

凜「とりあえず：先に進みましょうか。止めてしまった僕が言うのも変ですけど：これ以上話しこんで時間を潰してもいけませんし。脱出しない事には何も出来ませんしね。」

赤崎「そうね、この主人はまだ健在だわ。多分2階にいますと思う、ここからは気を引き締めて行きましょ。」

昴「みんなに何かあっても、みんなはみんなですよ。こうして会えたことも変わります。おかしくなったらみんなまで止めればいいだけですし。」

輪廻「おおい、簡単に言ってくれるね。でもそうだね。みんな頑張ろうか。」

卦堂「こんな所で立ち止まっても、何もねえしな。」

昴達が特殊な人間であることが確認出来た5人。だが、特殊であろうとも自分は自

分。なんにも変わらないことを改めて心に秘めた。

昂達は結束をかため、危険であるという2階へと進むのであった。

次回へ続く・・・

## 第5話

## 第5話「対峙」

館の2階にたどり着いた昴達は改めて、目的を確認する。

昴「ここに破道がいるのか・・・」

赤崎「ええ、そうよ。あの親父が何考えてるかは分からないけど、私達みたいな特殊な人間集めて変なことしようとしているのは確かだからね。」

そう、ここにいる人たちは全員特殊な能力を持つてる。昴のように人外だから集められたというのもあるが。破道の企みを潰せばこの館からも出れる。皆がそう思いを強める中、静かに殺気を漂わせる男が1人。

凜「卦堂さん？さつきからどうしたんです？」

卦堂「ん？ああ・・・ちよつと緊張してるだけだ。」

輪廻「そっか、確かにここに親玉がいるみたいだね。扉の奥から微かだけど声がする。」

昴「だが、扉は頑丈で鍵もかかっている。赤崎さん、こここの鍵は？」

赤崎「残念だけど2階の部屋の鍵は全て破道が管理してる。この部屋に入るにして

も、あいつがここから出てくる隙を狙うしか……」

輪廻「そっか……なら話は早いね。みんな、少し下がってて。」

そういうと輪廻は扉に対し集中力を高める。そしてその刹那輪廻の足が扉に触れたかと思うと、扉は物凄い音と共に吹き飛んだ。そんな神業をいきなり見せられて呆然と立ち尽くすしかなかった4人であった。

??「おやおや、随分と荒々しい。ノックも無しにこの部屋に入るとは……。まずは、あなた達に礼儀から教える必要がありますねえ。」

昴「あんたが破道だな？」

破道「ふむ、いかにも。おや？赤崎さんもいらしたんですか、なるほど。こんなにも早くここまで来れたのにも合点がいく。」

赤崎「私はもう会いたくなかったわよ。」

破道「くつくつく……それは私には関係ない事だ。どうやら全員お揃いのようだ。私の理論が正しかったと証明される時が今……」

言葉と共に振り向いた破道を見て一同は驚愕した。その形相はまるでこの世のものとは思えないほどに歪で、身体はまだ人間の様ではあるが片目は完全に人の目ではなかった。片腕も動物の腕や足と言うには程遠い、まるで触腕のようにうねうねとうごめいていた。破道は不敵な笑みを浮かべながらこちらを見つめている。



赤崎「破道・・・あなたはもう・・・」

凜「こいつももう人外だな。俺らとはまた違った類ののだが。人種が違うのではない、人間を捨てたんだ破道は。」

破道「捨てた？いや、違うな。生まれ変わったんだ私は。そして創造するんだ。下界から召喚されし者達によつてな!!」

そう叫ぶと破道は手元の本を開き、ぼそぼそとつぶやき始めた。

卦堂「やつを止めろ!!何か始めようとしてるぞ!!」

卦堂達はすぐさま破道の元へ駆けつけるが

卦堂の叫びも虚しく、既に破道は詠唱をやめ静かに本を閉じる。

破道「さあ・・・ここから私の世界が始まるのだ!!いでよ、ロキ!!」

破道は天に向かってロキの名を叫ぶ。輪廻や卦堂はいつでも戦闘が出来るように構えている。が、次の声は彼らの後ろから聞こえてきた。

??「随分と長い間寝かしてくれたじゃないの。」

そう、ロキを召喚されたのは黒髪に染まった、片目が黄色になっている昴だった。

次回へ続く・・・